

118 誌上発表

服部甫庵編『医官要編』と浅田宗伯

渡辺 浩二

渡辺産婦人科

緒言：服部甫庵（1804-1889）は、下野安蘇郡佐野（現栃木県佐野市）の医家九代目である。14歳で奈須恒徳（1774-1841）の塾に入り、24歳で業成り帰郷、その後も師家との交流を続け、またよく先祖代々の遺著を整理した。還暦を迎える頃、浅田宗伯（1815-1894）と交流を持ち、よく宗伯著作を写し、今に残している。服部甫庵の旧蔵書は現在、そのほとんどが杏雨書屋に架蔵されている。

今回、杏雨書屋の服部甫庵旧蔵書中に甫庵が編輯校正した奈須恒徳の遺著を見いだした。その編輯校正の過程に浅田宗伯がどのような姿勢で関わっていたのかを資料を基に明らかにする。

方法：『杏雨書屋蔵書目録』請求番号：乾5730『医官要編一卷附録一卷』（以下『医官要編』）及び乾5734『武官医編一卷』（以下『武官医編』）を対象とし、参考資料として『煉霞翁年譜一卷』及び五十嵐勤三郎編著『浅田宗伯書簡集（汲古書院）』（以下『書簡』）を用いた。

結果及び考察：『武官医編』には明治八年八月十五日付けの甫庵序がある。序には奈須恒徳の手沢が手元にあること、その遺著が失われるのを惜しみ一部謄写する旨と那須の詩が一編付される。その後『武官医編』は宗伯のもとに送られる。これは甫庵の他の写本同様、宗伯の意見と序文を得るためである。『書簡』明治八年九月八日条に「……那翁之医学感服仕候。武官医編ハ、未徹底不仕、即質問書余白ニ、鄙意相認置候間……。」とあり、『武官医編』に宗伯自筆の手紙が挿入される。そこには「武官ノ字不穩。或ハ武門ニ作ルベシ。然レドモ武門医編ニテハ不雅ナリ。姑ク望月鹿門ノ意ニ倣ヒ、医官要編ト改シテハ如何。（句読点を付した。以下同様。）」など、7項目を挙げて体裁の修正を迫り、さらに「……此書多年ノ苦学ニテ其博識感スルニ餘リアリ。但其體裁雜駁ニシテ明體體用ノ道ヲ失シ、読者多岐ニ陥ンコトヲ恐ル。喜多村枊翁曰那須翁ハ和漢ニ達シ、博識ナレドモ其学雜駁ニシテ大家ト云難シ。洵ニ惜ムベシト。老兄ノ敝師ナレバ其著ヲ指摘スルハ甚失敬ナレドモ枊翁ト同見ユヘ云タス。宜ク再思シ玉ヘ。」と厳しい意見を送りつつも序を認める。友人の師と雖も自らの評価をはっきり下し、さらに評価を下すだけでなく、より良いものとして残そうとする宗伯の姿勢が見える。その後十五年、『武官医編』及び『医官要編』の音信はない。しかし、甫庵は宗伯のその気概に答える。

明治二十三年、甫庵は『武官医編』を『医官要編』と改め、宗伯の挙げた七項目を忠実に守り、編輯校正する。一月七日付序文及び凡例には、今年が奈須恒徳の五十年忌に当ること、過去に編纂したものと合わせて足利学校に寄贈し、それにより保存しえたこと、さらに『武官医編』から『医官要編』へ編輯し直した経緯を示す。宗伯は五月付跋文（『武官医編』序文と同じ）及び岡田昌春「書医官要編後」を贈り、奈須恒徳を賞賛する。甫庵にとって、宗伯が那須を賞賛するほど嬉しいことはないであろう。『書簡』明治二十三年七月十五日条に「……医問（官）要篇御再改之段感服々々。……」とあり、宗伯の破顔が見て取れる。

服部甫庵が残した奈須恒徳及び浅田宗伯著書の写本には、たびたびこのような宗伯の意見や宗伯との往復書簡の中で得られた注が付されている。これらの注や往復書簡、甫庵の謄写時期などと考え合わせるにより、宗伯の著書編纂過程をも知ることが出来る。

結論：今回、杏雨書屋の服部甫庵旧蔵書中に甫庵が編輯校正した奈須恒徳の遺著『医官要編』を見いだした。その編輯校正過程に浅田宗伯の果たした役割は大きく、服部甫庵が浅田宗伯を唯一の師としていたことがわかる。また甫庵の実直な姿勢が宗伯の仕事にも影響していたであろう。

本研究は、武田科学振興財団、2010年度杏雨書屋研究奨励「杏雨書屋所蔵服部甫庵旧蔵書の調査研究」の一部である。